

—語り継ぐ—

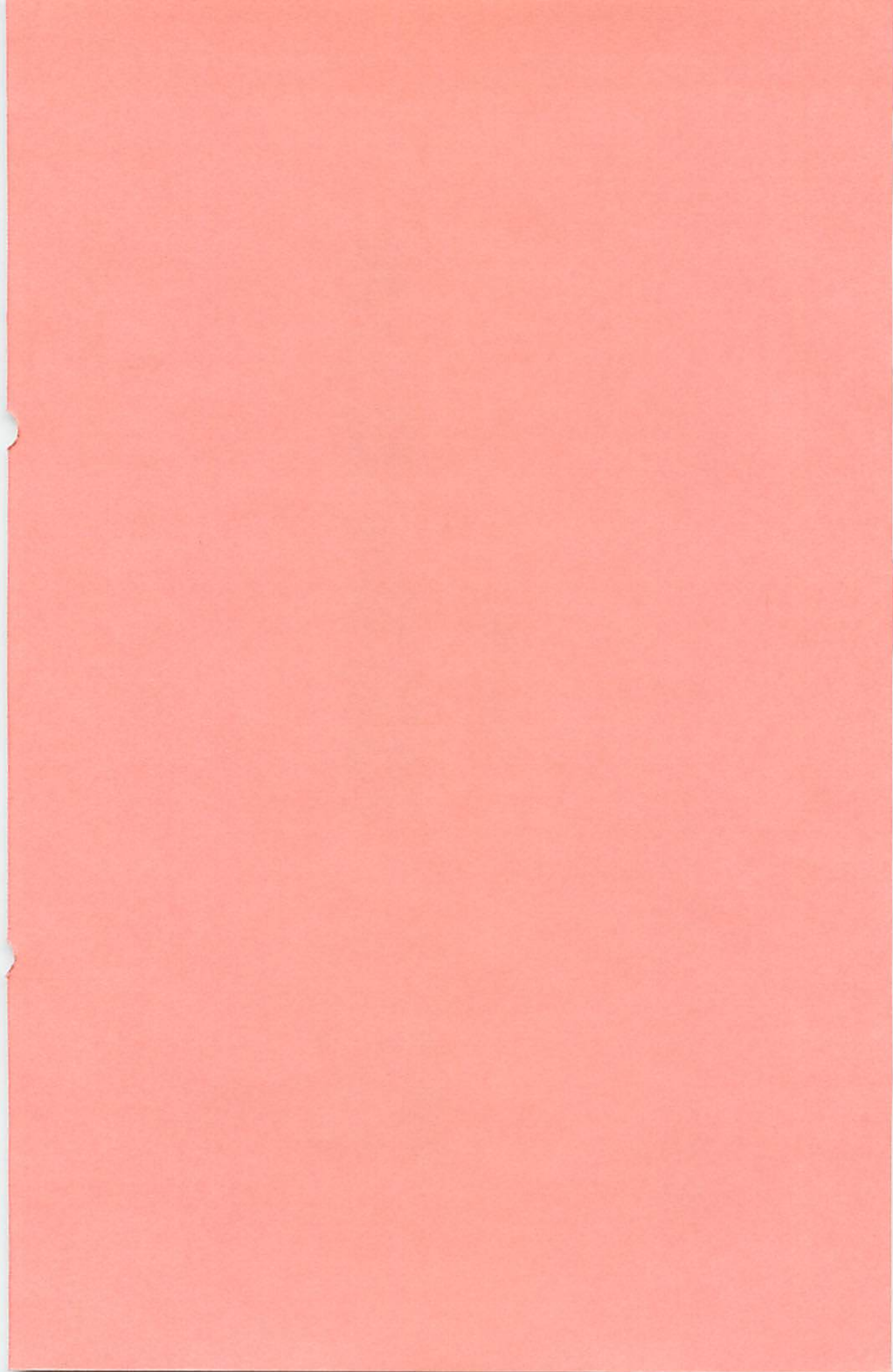
あの日のこと・あの人のこと—

私の戦争体験記

(第5集)

ふじさわ・九条の会





第5集、発刊にあたって

「私の戦争体験記」第5集をお届けします。多くのみなさんのご協力を得て、第5集まで発刊できたことに感謝致します。

今回投稿された作品も、いずれも貴重な戦争体験ばかりで、戦争中の苦労や悲しみがひしひしと伝わって参ります。多くの国民の命を奪った空襲は、原爆を落とされた広島・長崎ばかりでなく、東京・大阪・名古屋・横浜その他全国各地の地方都市まで及びました。戦後67年、国民のこうした戦争体験が、再び戦争を起こしてはならないという強い願いとなつて、党派を超えて9条を守り通した原点になつております。

今、一部の人々から改憲が声高に叫ばれています。戦後日本の平和と民主主義、経済的繁栄をもたらしたこの憲法を、次の世代に守り伝えてゆく事が、現代に生きる私たちの任務ではないでしょうか。

「ふじさわ・九条の会」としての戦争体験記の発刊は、第5集を持って終了致しますが、第1集〜第5集まで、多くの皆さん方に読んで頂き、戦争の悲惨さや悲しさ、平和を守る運動の大切さを知って頂く一助になれば幸いです。

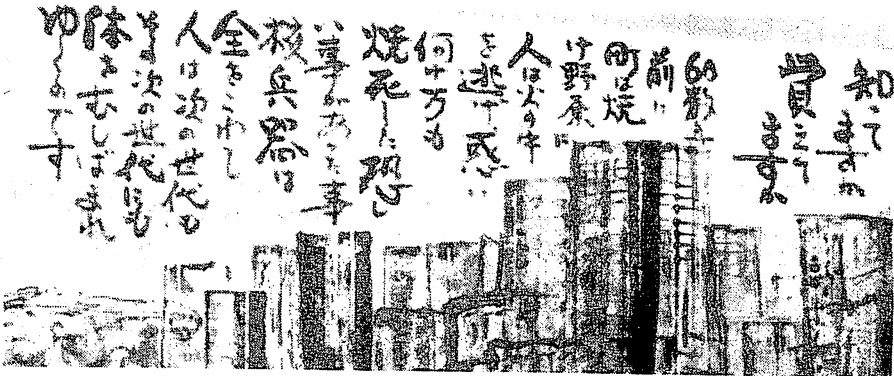
二〇一二年 六月

「ふじさわ・九条の会」

目次

戦中戦後の一ページ	佐藤 久美子	4
少年・少女平和の集いに行つて	森岡 一路	7
満州からの引揚げ	佐々木靖子	8
戦後生まれの私と戦争	藤田 治子	15
満州開拓・帰国時の話	小松 桂	17
私の戦争体験記・仙台空襲と		
軍国少年への道	鈴木 養身	19
忘れまい藤沢における		
戦争の記憶	編集部	26

つづり絵手紙 一田中 素子一



戦時の中学一年生 荒木昭太郎 28

祈り 水原 なつ 34

藤沢生まれ お米のご飯は 秋澤 和子 37

夢のまた夢 秋澤 和子 37

戦地でなくても犠牲 佐藤 香代 39

これが戦争 佐藤 香代 39

戦争がなかったらネ〜 芦見 国明 40

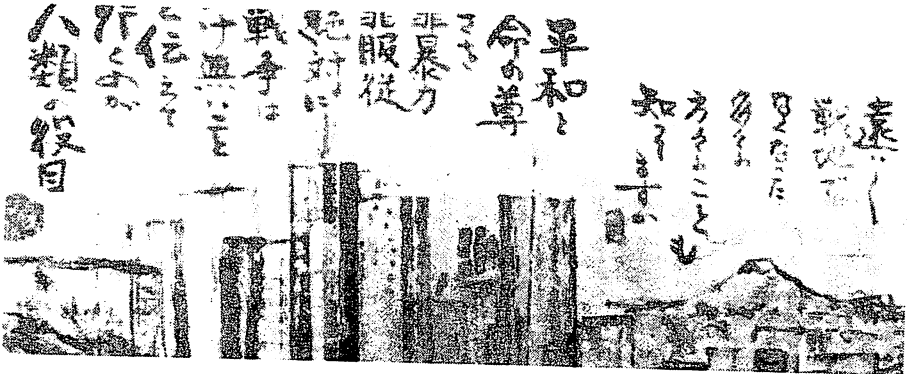
蘇る母の言葉 芦見 国明 40

招集兵を見送り 平澤 隼人 42

戦死者を迎えた毎日 平澤 隼人 42

「日の丸」への思い 井上 裕允 43

靖国の母 國枝 健 45



戦中戦後の一ページ

佐藤 久美子

(鵜沼桜が岡在住)

私の戦争体験は、周りの大人の話題、体験談が主だと思います。生地は福島県の小高と言う小さな田舎町です。海岸線であったこと、隣市に無線電信の高い塔があったことなどで、終戦間際になって、空襲警報、機関銃発砲、艦砲射撃という言葉は耳にしました。グラマン戦闘機、カーチス急降下爆撃機と言う小型機で目的を捕らえ狙い撃ちしたそうです。私の家でも兄の一人が二階にいて狙撃され、その部分はずっと違った建物だったということが後になつて分かりました。二階の襖、柱からは後年まで砲

弾が出てきたものです。立派な煙突がそびえ立つ珪砂工場と広大な屋敷、的になった小学校の防空壕の砂煙、父が経営の駅の四〇〇五〇の貨車が標的となり、グオオンという地響きと黒煙が三日三晩も臭いとともに続いたようです。短期間疎開はしたものの、祖父母が病弱で家を離れないことで、自宅の一部屋を畳をはいで土間に板を張り、暗幕を二重、三重に廻して、警戒警報と共に三歳児の私は、私係りの兄が手を引いて防空壕に入った時の一コマです。「砂工場と駅が燃えている」町の人の呆然とした眩き。小さな町が煤のような煙のような暗雲の中に屋根が見え隠れして脅えたような町と近所の大人の蒼白顔、無気力の人々の情景は、はつきりと覚えていきます。

仙台空襲の日、夕刻にB29は、ブブブオーンという不気味な空爆音を立て、黒の集合体の

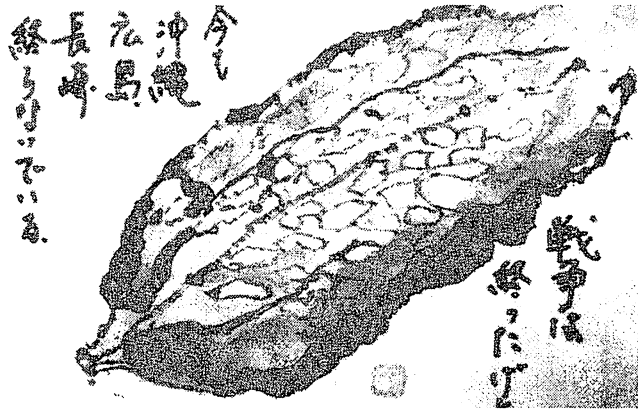
ような塊が等間隔で整列して北に向っていくのを外庭の大きい石に寝転び、数人で息を凝らして上空を見つめていましたが、まもなく北の夜空がマツカに燃え上がったのをみて、誰もが『仙台が燃えている』とつぶやき夜空をいつまでも眺めていたものです。

ヒマの種やら松根油を軍用機に使用を試みるという話も聞きました。中学四年生が班長となり、出征した農家の手伝い等にもクループで行ったそうです。飛行場の塹壕掘も同様で、表面を樹木などで覆っても、近隣も全滅だったそうです。長兄は学徒動員で、宇都宮の飛行場に配属され、理学部と言うことで、機械も飛行機のこと何も分らないのに一〇数人で飛行機作りで優遇され、その飛行機が飛ぶとき、全員が脱帽し、パイロットに最敬礼しながら、後年聞いたことですが、早々に「この戦争は負けであ

る。」と全員自覚したそうです。父の元で働いていた人で中国で捕虜になり、水攻めで首まで浸かってもう是で終わりと思ったその瞬間、周恩来が『日本人が悪いのではない、戦争が罪を作る』といって、帰還出来たという当時の生々しい話は、五、六歳ぐらいの私にも、戦争の悲慘さ、むごさが帰還兵の言葉、『周恩来は世界一』で人の偉大さと言うものが脳裏に焼きついた気がします。

四年の時、『今日から國は簡単な国になりました。』と担任弁。脱脂粉乳の給食の始まりもこのころです。のんびりしているためか、幸いにも戦争の悲慘さ、怖さを知らない部類に値するかもしれないが、貧しくとも楽しみに変える術はそなわっていて、代用食という品々も苦にならず、折り悪いこと、意に沿わないことなどは自己解決と同時に記憶の外と言うのも私

の生き方だと思えます。囲い、集団、物事に束縛されたり、他人、他物との比較がことの他苦手です。(いやいやながら防空壕に入ったことも大きいかな?) 現在下手が特色とも思える絵を描いています。私流に物事を見定め、ささやかな楽しみ、小さな喜び、発見が持続できるような真の平和を願って不戦の気持ちは止みません。



—大澤 紀子—

少年・少女

平和の集いに行つて

森岡 一路

(片瀬小学校3年生)

少年少女平和のつどいに行った。66年前
げんばくをおとされたばしよに行った。今は
アイスクリンやさんがあつたり、平和なばしよ
だった。でも66年前のしゃしんは、人も家も
バラバラで、こわれてやけていた。こわくて、
しんぞうが一瞬とまった。ひばくした人の話も
聞いた。こわくて、耳をふさいでしまった。そ
のころのごはんもたべてみた。水みたいなかゆ
とすいとんだった。味がしなくてまずかった。
まずくてまずくてのこした。

たべられないとないている子もいた。

せんそうなんてぜつたいにいやだと思った。

せかいには2まん2千600こも、かくへいき

があることもしつた。一ぱつでこんなに大へん

なことになるのに、どうすればいいんだ。にん

げんはなんでこんなものをつくつたんだらう。

ぼくは、ぜつたいにおなじことをくりかえさ

ないようにしたいと思った。

2010年 十一月



満州からの引揚げ

佐々木 靖子

(藤が岡在住)

昭和十八年六月女子学生だった私は、両親のす
すめに反抗できず結婚し、軍人であった主人の
任地、北満、孫呉に迎えられた。

黒龍江省は、ソビエト連邦に近いので覚悟す
るようにと、切腹のしかたを教えるといわれた
時は、急な身辺の変化にまごまごしていたので
欺かれた思いがした。主人は工兵だったので松
花江での渡河演習で二ヶ月留守となる。炊事は
石炭だが薪に火さえつけられず、薪割りもでき
ず当番兵は、天皇陛下の兵隊だから使用人には
使つてはいけないと。朝夕、馬での通勤なので

手伝うといつてくれるが頼めず、かまどにやっ
と火がついて、ほのほが明るくなると別かれて
きた家族の顔が浮かび日本に帰りたい、汽車は
一日一本と聞いているが北安、ハルピン、新京、
奉天それから朝鮮に入つて遠いな。父に送られ
てきた私は泣くばかりだった。

五ヶ月後の十月、転勤が中支と決定、戦地な
ので単身赴任となる。私はひそかに喜び妊娠の
兆しがあつたので、弟がハルピンまで迎えに来
てくれた。父は下関まで迎えてくれた。その頃、
米軍の浮遊機雷で釜山から下関までの航路は心
配ということで海の中でも生きていられるには
若い弟だということ、大学生だった弟が来た
のだ。北満からの長旅だったので、関釜連絡船
が下関に着くと父は『三人会えた喜び憲』と東
京に電報を打った。

実家で長男を出産し、十九年6月には主人の新

任地、チチハルへ又弟に送られ泣く泣く旅立った。弟に百日の赤ん坊のおんぶ替わりをしてもらう。船中ではおぶった上から救命具をつけてつらかったので助かった。

チチハルで十月まで暮らす、官舎郡に空き家が多くなり主人も行き先を告げず留守となり、隣の当番兵は朝鮮の少年だったので、暇な時間は四・五人集まるので、食事作りの話をしたり、長男のお守りをしてもらったりした。まだ平和だったので夜になると明るい家がめずらしくなり、庭に満人が飼っている豚が入ってくるのはびっくりした。満人部落の門は開けっぱなしとなり、軍隊は皆南方の戦地にいったのが満人にも分るのだと、私も怖くなった。一〇月部隊から電話。主人の任地、南満の奉天省營口にゆくようにと。四平街で乗り換える。そこには兵隊さんが待っていると。幼児のおもちやを目印

に。大慌てで荷造りをしてチチハル駅から二席しかない寝台車に乗る。上の満人のおじいさんが大きなアヒルの玉子をくれた。營口は大連に行く途中の大石橋から少し入った漁港だったと思う。当時の名刺に満州第四七四部隊長・陸軍少佐とある。以前は軍隊がいなかったらしく官舎もなく、街中の借り上げ官舎なので馬での通勤が目立って困った、主人の留守がすぐ分るのか、やはり満人の大泥棒に、買物に行った留守に入り込まれ、玄関を入ったら黒いカーテンをはずして衣類が山と積んであるのでびっくり。泣きながら主人に電話をするとまもなく来てくれたのが又満人なのでまたもびっくり。満人になりすませぬと捜査も出来ないとのこと。

その後主人は熱河に、新京にと留守が多いので押入れの奥を隣家につなげてもらいほった。ある日奉天に居るから会に来るようにと

の知らせ。昭和二〇年八月九日、親子三人会えた喜びも束の間、低空飛行の爆音に驚き見上げるとソ連のマークが良く分り、主人はあわてて出かけ、私は燈火官制の奉天駅から営口に戻った。さあ大変！ソ連が奉天に入ってきたのだから戦場になると日本人は日本領土であった朝鮮へ朝鮮へと移動を始めた。そんな時主人から一緒に居たほうが良いからと奉天にくるように知らせを受ける。皆から逆行することになるので近所の人たちに心配されたが、兵隊さんが迎えに来てくれ、十四日奉天着。主人の副官が奉天在住だったので泊めてくださることになる。翌一五日終戦。待っていた営口からの荷は満人の暴動で全部失った。主人はまもなく武装解除となるそう、別れにきたがこの日以後連絡無し。奉天はソ連兵が占領したので外出もできず、家にこもり、地下に隠れたり、女はみつかったら

一大事なので坊主になった。男は皆シベリアに送られるとの事。次は蒋介石率いる中国が占領、次は八路軍、驚くことばかりだが必死の思いで共同生活をした。二一年には居留民会ができその産院で二月十四日に出産した。四百匁足らずの小ささで育つことは無いからよくあたたためてあげてねと言われたが元気な声で泣くのが救いだった。子どもが一人となつては余計に副官の家に居づらくなり産院で親しくなつた郵便局の共同住宅に住む人に同居させてもらうことになった。

終戦時、主人の一年分の給料を全部さし出し、副官の家に世話になることになったが食事は一日二食となり一歳半の息子がお腹をすかせ奥さんの愛猫のお皿を空にしてしまう。申し訳なく赤ん坊は二階の押入れにしまい、奥さんの結婚二十一年目に生まれた六ヶ月の男の子にお乳の

足りぬとすることに私のお乳を飲ませ夜半も三人ひとつの布団にねているところにつれてこられお願いと云われればお乳を飲ませぬわけにもいかず月齢が違うので我子治子の分はなくなってしまうのだ。私の朝食には玉子を下さったが、息子に食べさせたいし、何とか出て行きたく、寒さの間は我慢して春になって大喜びで郵便局の4畳半に転居しました。

もう一文無しなので、朝早く市場に行き高く売れそうなものを買ひ、娘は布団にくるんで押入れに寝かせ、二歳の息子は綿入れのねんねこでおんぶし日暮れまで売って歩いた。タバコは飲み屋に行くとよく売れるといわれ、入って見たが子連れはくるなど追い出され、饅頭は、街角に立っただけは売れず一軒ずつ日本人の家を頼んで歩いた。帰途薪を買ひ、米を買ひ息子に食べさせ、留守番の赤ん坊は夜中お乳を飲み続

け何とか育った。

その頃、引き揚げの話がうわさされ、帰国第一陣は主人の居ない人と聞き、一週間分の食料を用意するように言われたがその日暮らしの私は途方にくれた。帯心でリュックを作り、首もすわらない娘をいれることにしたが三人の食料は？ ある日話をしたこともない副官の家の隣家の老人が訪ねてきて話があると。怖くて近所の人に見張りを頼む。その人は長年満州に居たため引揚げても知人もなく財産は日本円に変えられるのは一人千円だけの事。三人分、三千元を貸すから日本で返してもらいたい。あなたの実家は東京の歯医者さんと聞いているので住所を書いてくれと。

日本の家族は無事と信じ約束に応じた。月夜にはみんな同じ月を見て帰りを待っていてくれると息子にも言い聞かせていた。有難いことに

なつた。引揚げの長旅はどんなことになるのか、入浴の経験をさせておこうと願つて、『お風呂』と札を下げている家に入浴しに行く。

その頃私は奉天の北陵という市外に居たため引揚げの旅立ちは午前二時。集団に遅れぬように二歳三ヶ月の息子の手を引きずつて急ぎ、背中の三ヶ月の娘はリュックの中で姿勢を保てるはずもなく小さな鼻がすりむけ、駅に着くまでこの始末。やつとついた貨物駅で乗るのは無蓋貨車。班長さんに引つ張り上げてもらい、やつと腰を下ろす。小さな子供を連れている人は居ない。奥地から奉天につくまでが逃避行だったのだ。赤ん坊はみるみる真つ赤に日焼けしてしまひ六月の満州は日暮れば寒いのだ。皆が用を足す頃には貨車が止まり、野宿となる。どこからか満人が集まつてきて水を売る人、ゆで玉子を、まんとうを売る人などで賑わう。財産

を持つてゐる人は、引揚げ船に乗るまでに使つてしまわないと日本に着けば一人千円になってしまうので、おにぎり、カステラなど高価な物を食べていた。

月夜でないと、野宿の群から用足しに離れると赤ん坊を寝かせてきた場所には朝まで戻れず困つた。でも人に踏まれることもなく無事なのに亡くなった人が出ると皆さんうちの赤ん坊だと思ふのが日常茶飯事になつた。貨車もお金を上げないと動き出してくれず、一日でも早く港に着きたいから皆からお金を集めて渡した。幾夜、野宿をしたことか…。

やつとコロ島に着き屋根のある空き家に泊まることになる。まだお金を使い切れない人たちがお金のない人に持たせ、日本に着いて独り千円をもらつたら半分をくれた人に返す、ということになつた。やつとおにぎりやさんの最後尾

に並べるようになり、おこげのおにぎりをお息子と二人でほおぼった。

下の海を見るとアメリカ兵らしい姿が見え、上陸用舟艇が見え、日本に帰れる確信がもてるようになった。この船は甲板ばかりで船底で暮らす。トイレの度に階段を上り甲板に作られた囲いに行くのが海水が激しく怖かった。朝夕二回の食事は二歳の息子の只ひとつの楽しみでお弁当箱を鳴らし、『ごわーん！』と叫びつつ並ぶ姿が忘れられない。まだ日本が見えないころ病気だった男性が亡くなり、水葬となられ、今日まで苦楽を共にした想いが身にしみて悲しかった。赤ん坊を抱きしめもうすぐ日本につくのよと。満州生まれで日本の家族は誰も知らないこの子を死なすことはできないと。五日目くらいに博多港に着く。さあ、上陸となり引揚者用の畳部屋に一泊、日本円との交換、ここで三千

円返せといわれ半分と約束したと証明してくれる人が居て助かった。食事も用意されていて有難かったのにあんなにお腹をすかせていた息子が弱ってきて何も食べなくなってしまった。

山陰線經由で家族が疎開しているはずの埼玉県までの切符を貰い満員の汽車に乗る。赤ん坊がお乳を飲ませても泣き止まないので立っていた。韓国の婦人がお乳を上げたいと言ってくれた。私はここまで無事につれてきたのに赤ん坊をとられると思いつつ断った。『あんたは鬼だ！』と言われた。もう歩けないような長男をなだめつつ、やっと着いた東京駅では埼玉に行く元気もなくなり、ふらふらと駅を出てみた。

戦災のひどさを聞いていたが、東京駅は私が出発したころと変わりなく、人力車が暇そうに客待ちをしているではないか！父の診療所はここから近いので聞いてみると、その人は良く知

つていて『先生も元気』と言ってくれた。診療所から住いの有る目白まで。

目白の駅に降り立ったときの驚きはひどかったが、懐かしい果物やさんが、雨戸を台に並べて商売をしていたり、我が家は焼夷弾で焼かれるところを隣家が間引き疎開で空き地だったのでそこで火が止まったらしく以前と同じ姿でたっていた。知らせようもなく突然、『ただいまあ』と言ったので祖母、母の驚き方！『靖子！足はあるか』と祖母、『和彦は赤ちゃんになっちゃたの』と母。私は泣き続けた。弟妹四人に知らせにいつてもらい、皆揃って、あきらめかけていた再会を果たすことができた。

昭和二一年六月末のことである。



—牧野 美子—

戦後生まれの私と戦争

藤田 治子

(藤が岡在住)

(注、藤田さんは、前作品の作者

佐々木靖子の娘さんです)

母に脚があるかと言ったという。幼子二人を連れての引揚は想像を絶する苦難を乗り越へての事だったらしい。

瀋陽(日本軍占領時は奉天)では終戦後、軍人であった父はロシアへ抑留され母は大きなお腹をかかえて、兄を背負って持っていた物を売って生活を支えた。持ち物が無くなると中国人から餓頭を買いそれを売ったという。

私は昭和二十一年二月十四日、ロシア軍が入って来て大騒乱の中国瀋陽で生まれた。ふつうの赤ちゃんの三分の一の大きさで三日後には死ぬとお産婆さんが言ったという。でも私は死ななかつた。生後四カ月の二十一年六月に大連から母に二歳の兄と共に連れられて日本に引揚げて来た。勿論私には全く記憶にない事である。私は近所のお乳の良く出る方達に助けられて生命を繋いだ。母と兄と私が帰ってきた時、曾祖母は

私が産まれてからは足手まといになる私を押し入れの中に置いて商売に出た。(その為私は引揚げて来たとき痲痺病だったそうだ)やがて引揚のはなしが出て、親切な方に恵まれた母は必要なお金を東京に着いたら返すということで貨車に乗って(というか積まれて)大連に向かった。なかには日本人の女の子は頭が良いからと中国人に請はれ、我子を売った人達も多勢居たそうだ。私はどうせその内死ぬだろうと思われていたら

しく母は連れて帰ったと言う。貨車は何度となく止まり、その度にお金を運転手に渡してまた動くという事だった。夜は平原に雑居寝だったと言う。でも赤ん坊の私は母が居なくても大声で泣いていたそうだ。引揚船の中でも人が亡くなる、私と思われて皆が母の所に来たと言う。

無事博多の港に着き、陸路を東京へ向った。

母の実家の故郷は埼玉県栗橋町であったのでそこ迄の切符をもらったが、実家の診療所が築地にあり母はまず東京駅で人力車の車夫に実家の安否を尋ねた。すると焼失していないとの事で築地新富町の診療所へ行った。ちょうど朝食の時間で居合せた留守居のおばさんに迎えられるのである。祖父も診療所に出勤して来て、夕方には私達母子三人は目白の家族の元へ帰った。食べ物に不自由していた兄は芋が沢山あるのを見て「ウーン、イモ」と感激したと言う。

私は先にも書いたようにお乳の出る方からお乳を頂き命をとりとめた。また近くの聖母病院の小児科に診ていただき無事育ち、何と今年は六十五歳。母は今年八十八歳になる。父は私が三歳の時シベリアから帰り一昨年八十九歳で亡くなった。私が生まれた事など知らずにシベリアで働かされていた。

私は父や母や兄や、そして記憶には無いけれど私の人生の前にあつた戦争で、運命を揺さぶられた人々を思うと胸が痛む。もう二度とあつてはならない戦争。世界中が平和に歩むことを祈っている。

満州開拓・帰国時の話

小松 桂

(長野県在住)

満州国へ開拓団を送るといふ政府の方針によつて、信州・富士見からも開拓団が渡りました。目的は農業です。

まず先発隊が行つて、家族が暮らせるように準備し、そして家族が移り住みました。昭和15年で、私は小学校1年生でした。その年から国民学校となり、戦争をするための教育に変わつて行きました。男の子は兵隊になるのが当たり前、女の子は従軍看護婦になり兵隊さんを助けることを目指す教育をされました。食べる物もろくにないのに鍛練は厳しく50メートル

走・懸垂など繰り返し毎日やらされへとへとでした。又、小学校が遠かつたので、入学すると同時に寄宿舎に入りました。親と離れ離れです。小学校3〜4年でも勤労奉仕で農業を手伝いにいき、主にヒマ(唐胡麻)を作りました。農業はしていてもお米を供出させられるので、雑穀を食べていましたが、お弁当にお米だけ入つていないか毎日調べられました。

戦争中はそのような暮らしをしていたのですが、終戦になると、中国人が毎日、物盗りに来るようになったため、頑丈な建築物(学校・病院)で集団生活をするようになりました。それでも、八路軍により中国が治められてから軍隊によつて鎮めてくれました。その後、日本人だけを一箇所に置くことは危険という判断から、5人ぐらいつつ中国のそれぞれの村に分散させられるようになりました。でも、その当時はまだ

情報が奥まで伝わっていなかったせいか、中国人は私たちを大切に扱ってくれ、畑の手伝いをすると、昼食や夕食を食べさせてもらえました。中国人が日本人に対して厳しい感情を抱き始めたのは、文化大革命の後の教育によるものだと思います。終戦直後の満州では、南京事変を経験していた人たちは、自分たちも同じことをされるのではないかと自決しようとしていました。

その後、日本政府から帰国命令が出され、日本に帰国することになりました。ハルピン集合だったのですが、最初は屋根の有る貨物列車、途中から屋根のない貨物列車に乗って行きました。日本へは船で帰りましたが、2ヶ月を要しました。その上、日本につ着いても、検疫がありました。りなかなか入国できませんでした。衛生状態も非常に悪かったため、はしかや赤痢などがはやっつたためです。毎日亡くなる人が出ました。特

に小さい子どもやお年寄りには犠牲となりました。ようやく入国でき、故郷に帰ってきましたが、家を売って満州へ行った人たちは親戚に身を寄せて何とか暮らす状態でした。公地であった南原山を開拓して住むように言われ、みんなで作業で開墾し酪農・農業を始めました。今の様に重機があるわけではないので大変な苦勞でした。通して一番つらかったのは、やはり食べるものがなかったこと、そして近くで死を沢山見たことです。



—小出 玲子—

私の『戦争体験』

— 仙台空襲と軍国少年への道 —

鈴木 養身

(鶴沼海岸在住)

私は昭和7年仙台に生まれ、大学まで仙台で育てられました。昭和7年は中国東北地方の奉天近郊において日本の関東軍「満州を不法に占領していた日本軍」の手によって鉄道の線路が爆破され、これが中国兵の起した事件とこじつけられて起こった満州事変の翌年に生まれたのです。その5年後の年は12年・今度は北京郊外の盧溝橋で起こった一発の銃声から中国への全面戦争へと日本の国は突き進んで行ったのです。考えてみると私は生まれた時から「戦争」とい

う足音のする中で育っていったのです。

昭和14年4月、小学校に入学しました。

『サイタ サイタ サクラガ サイタ』『ヘイ タイ ススメ』という国語読本でした。昭和12年7月に始まった(日華事変)は、日本の学校をいやおうなしに戦時体制へと巻き込んでいき、小学校を国民学校へと改変していくのです。

国民学校は、戦争の影がますます濃くなってきた昭和12年に勅命に基づく「教員審議会」が設けられ、戦争遂行のための教育体制の刷新、振興が検討され、その行き着いたひとつの結果が昭和16年4月からの国民学校でした。

この学校の目的は国民学校令第一条(目的)に次のように述べられています。『国民学校は皇国の道に則り初等教育を施し、国民の基礎的練成を以て目的とす』とされ、子どもたちは閉ざされた日本にしか通用しない独善的

な国家主義を信奉させられ、次代の軍国主義を担わされる『銃後の戦士』としてはぐくまれていきましました。

その国民学校が誕生した年、私は小学校3年生でした。その年の暮、12月8日について日米戦争の火蓋が切られたのです。

開戦の朝、学校では全校生徒が寒気の迫る校庭に集められ、校長先生が日本はついに堪忍袋の緒が切れ、今朝真珠湾攻撃で火蓋を切り、はなばなししい戦果を挙げたことを誇らしげに話されました。その後も事あるごとに日本軍の勇ましい大本営発表の勝利の報告を聞かされ胸がとさめいたことを覚えています。私の子供のころの教育はまさに軍国主義のシャワーを浴びつけられ成長したのです。

昭和19年の春の日だったか、仙台の第二師団の主戦場だったガダルカナル島の戦いで敗北

し多くの戦死者（多くは餓死）を出し、その遺骨が仙台に無言の帰国をしました。その時仙台駅前に並んで出迎えました。駅から2キロも離れた青葉城内にある護国寺で切れ目なく2万名もの白い遺骨の列が続きました。

19年 軍の大本営は相も変わらず軍艦マーチの鳴り物入りで捏造した日本軍の戦果を勇ましく発表していきました。この頃を境に国民生活は窮迫していきました。7月から9月にかけてサイパン、グアムなどマリアナ諸島での日本軍の敗北（玉砕）、7月、東条内閣総辞職。そして十一月24日、サイパン島基地を出発したB29爆撃機八十八機が始めて東京に大規模な空襲を行い、日本本土への空襲が本格化したのです。5日後の十一月29日仙台の隣の塩釜市にB29一機が侵入して焼夷弾500発を投下、570余戸が焼失したのです。

空襲の翌年一月、私は旧制中学の入学試験を受けました。小学校ではその準備として「教育勅語」と大東亜戦争開戦の「詔勅」をそらんじ、

ことを課題として与えられました。12月に弟と母を相ついて失い、受験に熱が入らなかつたようです。幸いにして合格することができました。

入学しても落ち着いて学べる雰囲気ではありませんでした。六月には全校を単位とする中学学徒隊が校長を隊長として組織され、上級生は銃をかついで閩兵分列行進が校庭で行われました。また上級生は7月から原造兵廠で旋盤工として従事した。中学1年生は学校から数キロはなれた当時六郷村の農村に田んぼの草取りに動員されたり、校庭に芋を植える仕事もやらされました。その頃はマリアナ基地からのB29の空襲は常態化して東京大空襲もそのひとつです。

米軍は4月1日には沖縄上陸、7月2日には沖縄戦での勝利宣言。本土決戦もまじかに迫り、

一般市民はもとより、児童、生徒も国を護るため特攻精神が鼓舞され、天皇、国体維持のため、玉碎も辞さない覚悟が求められました。当時市長は市の広報に次のような『告諭』なる物を載せ、全市民ごとごとく防衛戦士たるべしと訴えています。

『今や戦局ハ日ニ危急ヲ加ヘ 敵ノ本土空襲ハ益々熾烈ニシテ東京都ヲ始メ全国主要大都市ハ防空戦場ト化スルニ至ル 吾等仙台27万市民ハ比ノ緊迫セル情勢ニ応シ総員決起一斷乎 皇国護持、本土防衛ノ重責ヲ果ズンバアルベカラズ一々要ハ全市民悉ク防衛戦士タルノ氣迫ヲ堅持シ一々訓練ノ充実ニ努メ 仮令敵機ノ大群來襲スルトモ一々身ヲ以テ難ニ当ルニ在リ一々有事ニ際シ身ヲ挺シテ防空活動ニ専念

シ 以テ国土防衛ニ任スル為ニ外ナラズー』

空襲の日が近づくにつれて敵機空襲に対する警戒警報のサイレンが毎日のようにありました。

(仙台での警報発令は4月5回、5月4回、6

月14回、7月は2日を除いて毎日)これは敵機が近づいているので気をつけようという合図

です。地元の河北新報の社説でも『東北大空襲5分前』として空襲への危機感をあらわにしま

した。仙台大空襲は、雲ひとつない快晴の7月

10未明からでした。前日の夜9時半過ぎ、気味の悪い警戒警報のサイレンが鳴り渡りました。

防空壕に入る準備をし、兄と共に布団に横になった。一時間くらいたっただろうか、警報が解

除となりました。松島湾上空に集結した敵機がどこかへ退散したようだというラジオ報道だっ

たようです。眠れないまま兄とおしゃべりをしているとき0時5分 突然空襲警報の唸る

ようなサイレンと『空襲だ!』と隣組の人の叫び声、急いで隣の今井さんとともに作った小さな防空壕に入りました。

見ると西北の空、仙台駅の方角が赤黒く燃え

盛っていました。(当時私は駅東側、現在楽天イーグルスの使用球場、クリネックススタジア

ムの近くで軍の演習場だったあたりに住んでいました。)恐る恐る見ていると敵機は何十機も

の編隊を組み、駅の西側で街の中心街と青葉城

の下にあった第二師団のある川内地区を南から北へと絨毯爆撃をしたらしかった。

B29独特のグオーン、グオーン、と言う悪魔のような唸り声(小学校の音楽の時間に先生が

オルガンでその和音を弾いてくれた)をあげて次々と進入してきます。探照燈も何本か交差し、

高射砲も唸っています。けれどその火力到達度は4千メートル以下だったと知りました。B2

9はそれより高いところを我が物顔に飛んでゆくのです。大砲の数も仙台を守るには十分ではなかったようです。日本の迎撃機に至ってはたつたの一機であったそうです。(アメリカ側の資料によるとアメリカ空軍はマリアナ基地より飛び爆撃機123機、投下焼夷弾92トン(1万2千961発)高性能爆弾8個、全市の27.8%を破壊または損害を与えた。B29の損傷8機 全機帰還 爆撃時間2時間2分)

三時過ぎ、爆音も聞こえなくなりましたが街のほうは依然として赤黒い煙が舞い上がっていました。幸い私の地区のほうには爆弾も落とされず、近くの騎兵隊と歩兵隊の隊舎も爆撃を免れた。その朝も父から町に行くことを厳重に禁止され、周りの大人たちのうわさ話をきくだけでした。

日本軍は、アメリカが攻めてきたら徹底的に

やっつけて勝利を収めるのだといていたのですが、B29に無抵抗に爆撃を受け、一機も撃墜させることもできずに終ってしまったことを大人たちはひそひそと話しておりました。

空襲の当日も3・4年生は家のことを心配しながらも工場に出勤していました。私達下級生は休校となり、翌11日学校に集められ、安否確認が行われました。私のクラスで焼きだされた人は一人でした。学校近くの火葬場には、百人を越す焼死体がよこたわっていたのを目撃した友人もおりました。そして1カ月後、八月一日に敗戦を迎えたのです。

その後、広島、長崎の原爆の話、沖縄の市民を巻き込んだ地上戦の話を書くにつれ、何とも表現できない恐怖におそれられました。兄も友人と戦争が終わったこと、日本が負けたことをなかなか信じられないと話し合っていたことを覚

えています。この年、1学期終了式は八月二十四日で2学期の始業式は9月十一日でした。

新憲法との出会い

昭和二十一年、中学2年の秋、新憲法が公布され、翌22年5月3日に誕生した。学校では約3ヶ月に亘り、社会科で新憲法の授業を受けました。その時心にしみたのは『戦争放棄』でした。

新憲法は日本人の犠牲者だけでなくとりわけアジアの国々の、犠牲者に対する反省の上に立つて生まれた憲法であろうと思っています。

私は教師として長年子どもたちに接してきました。何年となく沖縄修学旅行を企画し、戦争遺跡を追体験するとともに、『ひめゆり学徒』の話を伺いました。語り部のお一人、宮城喜久子先生は私と話された時、「人間のよき未来を

つく
創造るためにあるべき教育が、間違った方向

の国策として使われる時大変なことになります。そのことは私たちが体験した沖縄戦が証明しています。戦争は人間の尊厳が全く無視されて人間が人間でなくなってしまう。多くの学友を失った私たちが今思うことは、この真実を次の世代を担う子どもたちに伝えること、子どもたちの未来の幸福を奪われないように頑張ることだと思えます。」と語ってくれました。

私が軍国少年に育てられた道をたどると、すべての子どもたちに正しい教育を施すことがいかに大切であるか教えてくれています。

終わりに

この原稿を書いている時に、藤沢市の教育委員会では来春から市内の中学校で使う歴史と公民の教科書に多くの市民団体が問題を指摘してい

る。『作る会』系の教科書を用いることを決定したとの報道に接し、驚きと怒りを覚えます。第2次世界大戦を正当化し、憲法第九条を変えらるることを主張しているグループの教科書が用いられ、そのことによつてどのような子どもを育てようとしているのか。戦争のない、平和な日本の未来を豊かに語っていききたいと思つています。



— 鈴木 和子 —

―忘れまい、

藤沢における戦争の記憶―

編集部

させるために「コロネット作戦」を計画しました。それは100万ものアメリカ兵を相模湾に上陸させ、長い戦争に決着をつけようとしたのです。もし、この作戦が実行されたら、藤沢も沖繩と同じように破壊され、たくさんの人が亡くなったことでしょう。

終戦直後、

江ノ島沖に見たものは

今まで藤沢には戦争は無かったかのようにでした。しかし、実際には次頁の地図に見るように、海軍の基地や通信隊があり、軍需工場もありました。アメリカ軍機による機銃掃射も受けました。現在は、こうした施設は工場や、学校に敷地として使われていますが、かつてはこうした軍事施設であったことを覚えておくことも大切です。

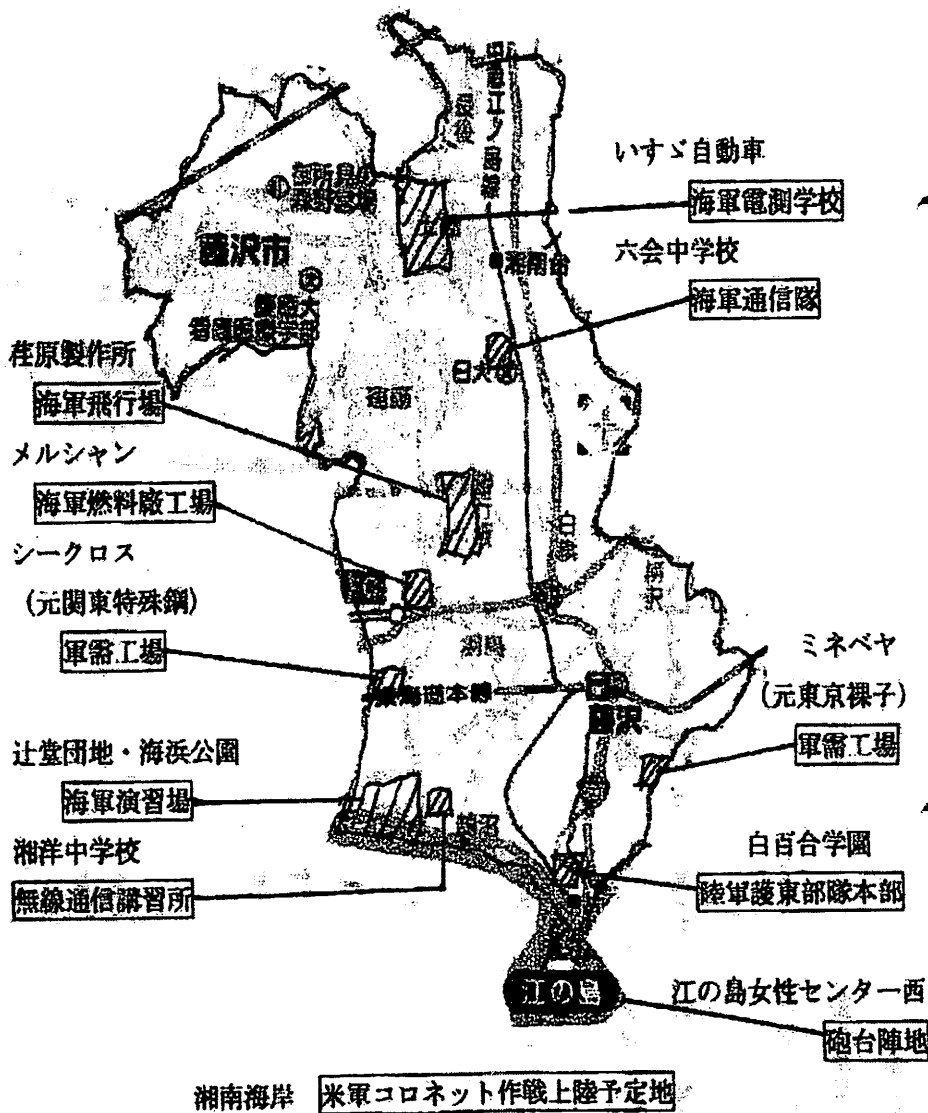
米軍のコロネット作戦が

実行されたら

アメリカ軍は、沖繩を占領した後、日本を降伏

目の前に想像もつかない光景が広がっていきつくり。当時は写真も禁止でしたから、あんまり見た人は少なかったのではないのでしょうか。それは、江の島沖の水平線を埋め尽くす米連合艦隊の姿でした。本土上陸のため待機していた軍艦だったのでしよう。ただ、夜になると白い赤十字の病院船がイルミネーションで浮き上がり、美しく輝いていました。と現場を目撃した安江さんは、話していました。

一戦争中・藤沢市内にあった軍需施設一



戦時の中学一年生

荒木昭太郎

(辻堂東海岸在住)

旧制度の中学校には五年間在学する。ぼくの場合、昭和一八年（一九四三年）四月に入学して、昭和二三年（一九四八年）三月に卒業するという、太平洋戦争末期の緊迫きわまりない日々ののち、戦後の、住居や交通や食糧などすべての生活面で不十分な状態へはいりこむ、苦勞にみちた期間なのだった。そのなかで、なにごとかを求め、志し、人びとと支えあい、分かちあい、喜びや悲しみをかわしあう。とりわけ戦いのさなかでは、当局や情報機関が伝え知らせる事柄は、ごく全般の、または一端のことで

しかなく、刻々と変動する、それもきわめて切迫した危険さえはらんでいたのだ。そこを、自分一個の判断と処理によってきわどくすり抜けていかなければならない。それは、一瞬一瞬を生きるはたらきそのものだった。紙もノートも不自由になりかかっていたこのころ、父が買ったまま使わなかったりっぱな造本の当用日記があり、それをもらいうけて記した昭和一八年のぼくの日記は、そのなかで揺れ動く心の表情を多少とも映し出している。それは、ほぼ曜日がびつたり合った六年前のもので、まだ日中戦争が開始されない、より平穏な時代の雰囲気を持たえた付録のページもおもしろい。祝祭日、皇室、日月食などが記され、巻末に国立公園、誕生石、釣りの秘訣などの説明がつく。

幸いにも入学を許可された横浜第一中学校の制服は、黒い帽子と、黒蛇腹つきの詰襟上着と、

黒ひもで編みあげる白布脚絆という蠟爽とした装いのはずなのに、一年前からすべて軍隊ふうのカーキ色に統一され、戦闘帽、折襟上着、巻ゲートルといういでたちに一変してしまった。朝礼のとき運動場に整列し、右側の上級生たちの隊伍を眺めると、服装の格差はあきらかだ。しかしともあれ、学び、伸びていくものたちとしての対等の意識は、なんら変わるところがなかった。各学年にそれぞれ約五〇名の組が五組づつあり、五年生だけが四組だったのは、四学年終了の時点で旧制高等学校、旧制大学予科、陸軍士官学校、海軍兵学校などに合格する生徒がかなりいたためだったか。

左胸には校章入りの名札をつけ、先生方や上級生たちに行きあえば挙手の礼をしなければならぬ。授業時間のなかには教練というものが週に三回もあり、分列行進の練習などをする。

週二回の武道では、剣道と柔道にわかれて稽古をする。防具、竹刀、稽古着などは各自の調達だ。時折り行軍という行事があり、鶴見の寺や保土ヶ谷の農村まで、一〇キロメートルあまりの分列行進を企てる。桜の花が満開だったり紅葉が鮮やかだったりする時節は嬉しかった。ともあれ、平和な時代とずいぶんちがう空気、場面のなかに自分をさしいれなければならぬ。多少はときめき、多少はあわてながら歩みを進める構えは、健気と言えなくもなかっただろう。

中学校の学習科目として一段と新鮮な魅力を感じたものは、まずは未知の英語で、『ニューライト・リーダー』の第一巻を使い、「カム・マイ・ダヴ」と、生き生きした場面がはじめに出てくるのが気をひく。国語は導入が印象的な夏目漱石の『草枕』の抜粋その他を載せた読本を使う。それに添えて『東西遊記』の風景描写

の文章などもある。国文法の課目では、全然知らなかった言語のシステムへ眼をひらかせられるのが嬉しい。書道はまったく下手で、乙の評語もいただけなかったし、体操もすばらしい運動神経を持った連中がいて、おくれをとるばかりだったが、さまざまな科目に充実したパラエティーを実感するところに張合いがあった。

このような学校での勉学の外側には、当然家庭での日常の準備と確認の作業があった。しかし、当代のような、さらに別途の補充の手段、便宜などはない。妹や弟たちと野球ゲーム、十六むさし、将棋、かるたなどを楽しんでいる。

映画へも連れ出し、『桃太郎の海鷲』という白黒長篇劇画を見る。これは、隊長以下、犬、猿、雉が部下として活躍する、真珠湾攻撃を漫画に仕立てたものだった。また、深谷甫 『軍艦の形態』や海野十三『浮かぶ飛行島』などをねだ

って買ってもらい、くりかえし読んだことなどを見れば、国家と社会全体を巻きこんで運ぶ戦争という流れのなかに位置づいていたことはあきらかと思われる。とはいえ、別途に『落語全集』を読んで大笑いをし、『雷電為右衛門』の少年講談を楽しみ、『ああ無情』で怒りを発し、『巖窟王』でフランスの現場を想像する、などということをしている。きびしい周囲の状況はともかく、それぞれの個人は、幅ひろくやわらかいとらえ方、生き方を保って、それぞれの独自の個性、生き方を鍛え、充実させていたのかもしれない。

そのような生活の進行のなか、五月下旬の日記の欄に、「山本聯合艦隊司令長官は戦死された」とあり、翌日には、「沖に戦艦以下の大艦隊が横須賀湾を壓して碇泊してゐた」と記している。目の前にひろがる壮大な、異様でもある

情景を、ひたすらおどろき、また興奮して眺めていたようで、「家へかへってからうんとべんきやうした」としめくくる。しかし、他のところには、そのような状況を冷静に、客観的にとらえている眼があった。課目のひとつに修身という時間があつて、これは時局についての講話だった。知的な風貌の帝国大学出身の先生が、これは八月の末だったか、イタリア軍がシチリア島から退却し、ドイツ軍がロシア中央部のオリョールの町を放棄し、日本軍がキスカ島から転進したことなどを話された。先生は憂いをこめて時局の暗転を見つめ、あまりにも若い少年たちの前途を思いやつてくださったのだらう。このあとほどなく、イタリアが降服することになる。このころ、教練を教える陸軍の将校たちはしばしば急な欠講をして、生徒たちの自習や代理の先生の即席の談話で埋められた場合

がおおい。青少年をどう育成しようというのか。英語の勉強も進んで、文章のつくり方や疑問のたて方などを自在にこなせるようになる。国文法の品詞の分類や機能についての解説は、理の筋にかずかずの実際の表現を結びつけていくところに魅力を感じた。東洋史では、中国の古代王朝、インドの仏教などについて学ぶが、世界のひろがり、時間の長久などに想いがおよぶと、今おこなわれている戦争などはどういふものなのかと考えてしまう。漢文で習う教材のなかの、「徳は孤ならず。必ず隣あり」という『論語』の文句が、いつもたち寄り伊勢佐木町の有隣堂の商号の出典だったと思ひあたる。国語の担当は、のちに横須賀市長になられる長野正義先生で、組担任でもあり、噛んで含めるといふ言ひ方そのままの、ていねいで行きとどいた説明をしてくださる。志賀直哉の『焚火』に出てくる

湖畔の夜の描写が、表現の冴えというものを伝えてきて、のちに原典へ読みを進めていくときの確固とした一里塚となった。一步一步あゆむ足どりのかさなりが、またそれを自分自身で納得し肯定するいとなみが、やがてたがいに作用しあい、はじめての時期とはまたちがうスケールでの連動となる。そのような含みをこめた時間を保ち、ゆるやかに押し進めていくことこそ学習であり、また周囲からすればそれが育成なのだ。この時空間を守って立つ、ひろやかで心やさしい場を、火と煙のなかにほろぼしつくそうとする暴力はどこから来るのだろうか。昭和一八年の秋が深まるころ、何次にもわたるブーゲンビル島航空戦の容易でない報道がはいつてきた。また、ベルリンの空襲の激烈なさまが漠然とながら伝えられる。このようなとき、やけになるとか精神不安定に落ちこむというのではな

い。気を張ろうとつとめる感じで時を渡っていく。この場合、そうとしかできないのだろう。国の危機の側へも、個人の不安の側へも、どちらの崖へも落ちいらぬまま、中央の尾根筋を、ひたすらぬのか、上の空なのか、ただ黙々とたどっていく。東洋史の試験に、唐と朝鮮の関係、アラビアのマホメット出現の以前と以後の状況の差と彼の出現の意義、「長恨歌」の内容、北宋画と南宋画の区別などが出題され、「どれも大体できた」と日記に書いてあるが、なんということだ。戦況とは別に、学習と体得はこのように進展していくのか。しかも世界をひろく見わたしさえしている。このような構えこそ、戦いのなかの心の支えとなっていたのかもしれない。ほかに何かあるのだろうか。昭和一九年の元旦は、母の苦勞の末にともかくも雑煮が用意され、煮豆、昆布、数の子、つくだ煮、人參、

ごぼう、こんにやくなどが食卓に載り、家族一同で祝ったことが記してある。先行きはどのようになるのか、不安でもあっただろう。このあと、朝暗いうちから始発電車で出かける剣道の寒稽古が、土曜、日曜を通して十日間も続いた。冷たい空気のなかで打ち合い、肘に竹刀が当たるととても痛い。指導する年配の先生がたも、声をふりしぼって一生懸命だ。同じ方向へむかって頑張っているという感覚が湧いてくるとき、そこに現れるものは、いじめでもたたきでもなく、支えあい、励ましあいそのものと実感されるのだった。



— 神成 幸江 —

祈り

水原 なつ

(相模原在住)

昭和の初めに生まれ満州事変、日中戦争、太平洋戦争と十八才までの青春を戦争に奪われた私たちが居なくなったら、戦争を知らない人ばかりの世の中になることが、もう目の前に迫ってきました。

戦後、ノーベル賞一号となられた湯川博士の奥様(すみさま)が、『世界連邦政府』を指すという運動を起され、十年を経た頃私も入会した覚えがあるのですが、その会がその後どうなったのか？分らなくなりました。今は『九条の会』が平和を保つ砦と信じて行動しています。

戦争が人間に与える被害の酷いことは、映画や記録により知識として報ら^しられていても、

やはり自分が体験した戦争の恐ろしさは書き残さなければ・・・との思いに駆られ、私の少ない体験を書くことにしました。

昭和二十年一月、太平洋戦争も末期に入り、女学校四年生になった私たちは、遂に軍需工場に通うのが日課となりました。前の職場勤めで肺の病気になる、労働に耐えられない私達病弱グループは、非国民というレッテルを張られ、お寺の宿坊合宿で海軍士官から鍛えなおされる生活を強いられました。朝六時起床。(炊事当番の日は五時起床) 点呼。一籽(いちきろ)駆足(かけあし)(雨の日はお寺の中で海軍体操) 『脱脂大豆』入りの玄米粥。干し大根葉か、ねぎの浮いた顔の映るような塩汁、漬物、梅干ひとつ。お腹の空いている私達は不平も言わずに頂いたものです。(ただ先生方のご努力で病弱組の私たちには貴重なバター一切れがそえら

れていました。) 午前中は先生が見えて戦争に勝ち抜くために、とにかく心身を鍛える講義があり、午後はお寺の境内に防空壕代わりの『蛸つぼ』堀り。それが私たちの日課でした。そのような日々の中でも、(今思えば多分反戦思想の持ち主だった英語教師) N先生の週に一度の午後の授業だけは忘れられません。ご自分で手廻しの蓄音器とレコードを持参され、当時普通には絶対聴かされなかった西洋音楽。ロシア民謡、イギリス民謡、ショパンのピアノ曲と当時私たちには憧れの美しい調べ。その時間だけが現実の戦争を忘れ、乙女の夢を見るささやかな慰めのひとときでした。週に一度、帰宅を許される日曜日は、皆一目散に家路を急いだものです。

その日は、久しぶりに警報の出ない、さわやかな冬の朝でした。家への帰り道を急いで歩いて

いた時、突然爆音が聞こえてきました。それも一度に沢山の飛行機が群をなして現れたのです。『きっと日本の飛行機が警戒しているのだ。』と見送った時、今度は別の方向から、かなり低空の爆音が聞こえてきました。『銃撃されるゾー。かくれる』川の向こう岸で怒鳴る男の声に、私は夢中で川べりの砂地に飛び降り、橋げたの陰に駆け込み、防空頭巾で頭をかくし伏せていました。『ダダー、ダダー』川原の石に当たった弾丸(たま)は、キーン、キーンと金属音をたてて水にとび込み炸裂しました。どれ程の時間が経ったのでしょうか。必死で耳を覆い、砂地に伏せてふるえていた私がそーっと頭をあげてみると。去ってゆく飛行機の胴体には、はつきりと星のマークが見え、初めてそれが敵襲だったことを知ったのです。河原のそばにはK航空機の寮が有、その朝の機銃掃射で大勢の人が

殺されたことを後で知り、私は助かったのだ！と実感しました。その時の恐怖が数十年を経ても尚、私の夢の中に蘇ります。

もう一つ、忘れられないのは三月二六日。K市初空襲の夜の光景です。爆音が去り警報が解除されてほっとして防空壕から首を出して見上げた西の空に、今しも花火のような無数の火の粉がきらきらと落ちてゆき、思わず『きれいな空だ！』と。その瞬間、ものすごい轟音と火の手が上がりました。みるみる広がった火の手は、西の空を真っ赤に焦がして、いつまでも燃え続けました。今でも花火を見るとその光景が重なります。

その翌日が私たちの卒業式。焼け残った郊外の小学校の講堂で式は行われましたが、着のみ着のまま集まった私たちは前夜の空襲の恐ろしさを語り合いました。いつ又サイレンが鳴る

か分らない不安におびえながら異常な雰囲気の中で式は始まり、名前を呼ばれても答えない生死不明の友も数名にとどまらず、『蛍の光』も卒業証書もなく、別離の悲しみだけが胸に残りました。親友のTさんは熊本、Uさんは広島、私は北海道へとちりじりに疎開しました。広島に行ったUさんはクラスメートの中で唯一の原爆犠牲者となりました。(皮肉なことに彼女はハワイ生まれでした)

あれから六五年。日本は『戦争放棄』シアメリカの基地は沖繩を始め全国にあり、いつの間にか電力は原子力に頼ってきた日本列島、

「核」の危機にさらされているのが現状です。

地球は一つ、地球上に生きる私たちすべてが「地球人」であることを自覚して、争いのない、核に依存することのない日の来ることを、ひたすらに希い、祈る日々です。

藤沢生まれ

お米のご飯は夢のまた夢

秋澤 和子

(亀井野在住)

敗戦の昭和20年8月は私が6歳で、小学校1年生でした。空襲警報が鳴ると電球の上の笠に黒い布をかけ外に光が漏れないようにしました。そしてすぐ近くの山にあった町内用の防空壕に避難しました。

自宅は藤沢駅から銀座通りの先を7分くらいのところでしたので畑もなく、農家もなく食べるものがありませんでした。食糧の米、パンは配給制度で米穀通帳がないと受けられない状況で

した。サツマイモの葉や蔓、カボチャの種、豚の飼料にするというふすまをパンにしたもの等、お腹がすいても臭くて食べられませんでした。お米のご飯は夢のまた夢で、大きな鍋にお米はほんの少して、お椀によそつても米粒は何粒かのお湯ばかりでお粥ともいえないものでした。

「四六時中 腹すかせをり 敗戦日」和子
学校の往き帰りに上空にはB29が烈しい音を立てていました。コンクリート製の大きなゴミ箱の蔭に隠れて行き過ぎるのをじっと待っていたことを覚えています。それでも藤沢は爆弾が投下されなかつたので良い方だったのかもしれません。

戦争が終わっても同じ学年には戦災孤児が何人も唐池学園という施設から通って来ていました。映画になった「鐘の鳴る丘」のモデルの様な感じですよ。食べるものも着るものもなく、母

の着物を再生したものを着ていました。ですが、
貧しいなりに良い友達にも大勢巡り合えて心は
豊かだったと思います。

覚えていることを羅列したに過ぎませんが、
今でも世界では戦火が広がっています。日本は
戦後65年、明日の平和を考え、戦争は絶対あ
ってはならないと強く思います。

私が「九条の会」に入会したのは、

「白旗の少女と同齡沖繩忌」 和子

の句を詠んだことからでしょうか。戦争の悲劇
を過去のものとしては、いけないとの思いから
です。

「ねがい」 31号掲載



— 田中 素子 —

戦地でなくても犠牲

これが戦争

佐藤 香代

(今田在住)

産めよ増やせよの掛け声に、我が家にも三男四女が誕生、私は6番目。養蚕の盛んな山形県・蚕桑村(現白鷹町)で、山裾に桑畑、東に向かつて全面タンポが広がる静かな農村に、戦争の恐ろしさは伝わらなかつた。

体格の良かった長男は戦争が始まると同時に出征した。二男は徴兵検査の度、背が低すぎて不合格となり、肩を落として帰ってきたが、終戦の声を耳にした途端ぐんぐん背が伸びた。その時、合格した多くの仲間が戦死してしまつた。長女は入隊を目前にした農家の長男と結婚、高島田の髪で花嫁らしくはなつたが、矢ガスリ

の着物にモンペをはいての旅立ちだった。

丁度田植えの時期で、結婚した翌日から田植えだったという。間もなく主人は出征、2人の姑に任せ、労働力としてつらい毎日を過ごしたようだ。家に帰つた姉は死んだように寝入り、帰る時間になると帰りたくないと言う。我慢してガンバレとはげます母が玄関で押しつ押しされつ、母・子ともに涙していた姿を思い出す。

敵機の姿を見る事もなく、小学6年で終戦を迎えた。教室にいるより、田植え・田の草取り・いなごとり・落穂ひろいなどの作業がほとんどだったように思う。

こんな暮らしが当たり前でおかしいとも思わず過ぎた事が不思議に思われる。思考力をも奪い狂わせる教育、そしてマスコミの影響の大きさを改めて痛感させられる。

「ねがい」 32号掲載

「戦争がなかったらネ」

蘇る母の言葉

芦見 国明

(亀井野在住)

私は、昭和21年満州奉天で生まれ、日本への最後の引き揚げ船で帰国しました。生れて間もない私は栄養失調で、生かして日本に帰国するのには両親は大変苦労したそうです。生きて帰国できた赤ん坊は私一人で、他の赤ん坊は全員青酸カリで命を絶ったそうです。両親が、長男で一人であった私を、みんなの反対を押し切って何としても生きて日本に連れて帰る強い思いがあつて現在の私がいいます。今、両親に感謝しています。

両親は、当時の話をあまりしませんでした。

私も満州での記憶はなにもありませんから、両親がどんな思いで奉天から大道、日本までの道のりを生き延びたのか大人になるまで想像することができませんでした。

しかし、戦争の傷跡は身近に多くありました。東京武蔵野のメッキ工場の社宅にいた頃すぐ横には500キロ爆弾の大きな穴、爆撃で破壊された民家、ゼロ戦を造っていた工場等があり、社宅の子どもたちはそんな場所で遊んでいました。戦争ごっこをしていたのです。

私が5歳の時父と、三島に行くことになり、東海道線の前に広がる焼け野原が眼に入った時、なぜか心寂しく感じた思いがあります。社宅のお兄さんで行った上野動物園。あのガード下は戦災孤児になった子供たち、白い服と戦闘帽を被った傷痍軍人の人たちを見ると、心寂しくなりました。

私の両親は、父が42歳、母が56歳で亡くなりました。母とは亡くなるまでの3年間生活をしました。私が25歳と28歳のときで、そのとき満州での話を聞きました。話は、美しかった奉天の町、楽しかった父との生活、イヤな事は話さず、「戦争がなかったならネ」で終わりです。

私は今、65歳、両親より長く生きています。最近、母の言葉「戦争がなかったらネ」のつぶやきが心に蘇ります。

必要があり謄本を見たときです、そこに昭和21年1月5日中華民国奉天市大和区葵町54番地で出生、父芹見忠明届け出、25年8月3日妻入籍と書かれていました。空白の4年間をどんな想いで生きてきたのか。

私の名前・国明が両親の思いを強く感じます。日本が明るい国になってほしい、そう願っ

ていたのだと思います。

今の日本の状況は、多くの人たちの命を、生活を破壊した反省から、戦争をしない国になつたはずでしたが、また戦争ができる国への動きが強まっているように思います。

私は、「戦争はダメ」平和な日本でいられるよう、「九条の会」に入会しました。

「ねがい」33号掲載



—安田 瑞代—

招集兵を見送り

戦死者を迎えた毎日

平澤 隼人

(亀井野在住)

私が小学校(宮城県刈田郡円田村)の頃、朝校庭に集り、召集兵を日の丸の小旗を振ってバスの停車場まで見送り、夕方は(海ゆかば)の歌で戦死者を出迎える日々が続きました。学校の講堂で村葬が行われましたが、集る者は老人や婦人と子供達だけでした。人手不足の農村は私達低学年でも、毎日芋ほりや麦踏等手伝いを強いられ、授業などはありませんでした。

空には日本の飛行機ではなくB29やグラマ

ン等米軍機が飛び交い、私たちは森や藪に身を伏せて震えていました。山羊にまでグラマンが機銃掃射していました。

仙台が空爆された時、爆音に震えながらも赤く染った夜空が、遠くからでしたが見えました。

B29には日本軍の高射砲の弾は届かず、なんの打つ手もなく、子供心に日本は負け戦と思っていました。皆が死を覚悟していたので、私も死ぬものと思っていました。

栄養失調で目だけギョロつかせる子供達や家族に、「後はたのむぞ」と戦地に向かう人達の声が今でも耳に残っています。子供心にもなぜ戦争が起きるのか、権力者、政治家の欲望等民衆を巻き込む事は許されることはありません。

「ねがい」34号掲載)

「日の丸」への思い

井上 裕允

(大鋸在住)

私は満州国(今の中国の一部)の奉天(今の瀋陽)で生まれ主に大連で育ち、国民学校(今の小学校)2年生の時、大連で終戦を迎えた。大連は、大日本帝国が力を注いで整備した街で、理想的な文化都市だった。

そんな街を傷つけずそのまま占領するため、空襲らしきものもなく、地上戦もないままに為政者が変わり、満州の奥地にいた人たちのような苦難もなく、あとで聞いたような内地の人たちのような爆撃の恐怖も味わわずに済んだ。その代わり、終戦後が大変だった。

強制的に一軒の家に数家族が住まわされ、知らない家族が襖一枚を隔てて息を潜めて暮らして、襖の向こうで「肉の匂いがした」とか「米を食べた」とかが問題になった。

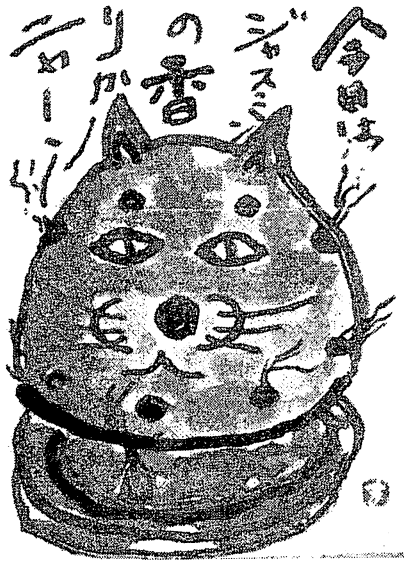
ロシア兵の強盗にあい、中国人の嫌がらせを受けて、日々戦々恐々と暮らし日本への引き揚げを待った。

引き上げも大連港からなので、奥地の人々が味わったと聞く港までの「死の行軍」はなかったが、收容所に集められて引き揚げ船に首を長くして待つのには、長くつらい時間だった。

だが、長くつらい收容所暮らしを耐えたあとに見た、あの引き揚げ船が掲げた「日の丸」の感激は今も忘れられない。

敗戦後は、中国国民軍やソ連の旗ばかり描かされて、「日の丸」は掲げることは勿論、持つことさえ堅く禁じられていたから、「日の丸」の

感激は子供心にもひとしおだったのだろう。
戦争のイメージと結びつけて、または「君が代」と一括りにして、「日の丸」を嫌悪する人の気持ちも分からぬではないが、悪いのは「日の丸」を掲げて戦った「人間」であり、また、今の世に相応しくないのは「君が代」であり、「日の丸」そのものには何の罪もない。そんなことよりも、戦争を体験した人が滅り、いつかなくなつて、戦争の残酷さ・悲惨さが風化されることを憂える。
私の戦争体験なんて甘いかも知れないが、あんな歴史は繰り返してはならない。
決して繰り返してはならない。
戦争はみんなが「敗者」で、「勝者」なんていないのだから。



—川戸 つや子—

靖国の母

國枝 健

(鶺鴒沼藤が谷在住)

昭和19年4歳になったばかりの私は、九州・福岡県の香春岳という石灰山の麓に住んでいた。父は、淺野セメント九州工場に、勤務していたのだ。今思うと、セメントも軍需産業なので、戦争に行かずに済んだのかと思う。

その社宅に今まで見たことも無いおじさんが訪ねてきて、我が家にあつた刀のひとつを父が手渡しているのを襖の陰から覗いていた。刀をおでこに押しつけて礼を言っている人のその手を握って、母が泣いていた。

帰り際、私の頭を撫でながら「元氣でいるん

だぞ！」と言った。優しく澄んだ目が氣にかかり、あとで母に聞くと、五人兄弟の一番末の弟で、少尉になって南方に出征することが決まり、「最後のお別れに来た」のだと知った。

戦争末期、北九州工業地帯に米軍機が爆撃に行く通り道のため、毎日、午前10時と午後3時に空が見えない程、群れて通過するのだ。

母は防空頭巾をかぶり、袴をはいて竹槍を小脇に、一日おきに婦人挺身隊の訓練に行っていた。母のいない時、空襲警報が鳴ると、生まれつきの妹を背負った姐やと婆や、爺やに手を引かれて屋根のない露天掘りで下に水がたまつた防空壕に入つて、B29をやり過ぎすのだった。中学生の姉は、学校の裏山に逃げるので安全だと聞いていた。時折り飛行機のジュラルミンが太陽に反射してきれいだと思っていると、高射砲がだいぶ手前で力なくはじけるのを何度

か見た。

あれから十八年後、昭和38年4月に22歳で親の反対を押し切って新聞社に入社。4ヶ月間の記者研修の後、東京オリンピックの前年、いきなり現場に放り出された。敗戦記念日の靖国神社へ取材に行くことだった。

靖国神社の鳥居にすがって長い間泣いているお婆さんを見た時、こどもの頃から毎年見ていた叔母と母の泣く姿と表情が頭をよぎり、無意識のうちにシャッターを切ったのだろう。その老婆の表情が「靖国の母」のタイトルで、夕刊の一面を大きく飾ったのだ。トップ記事になったことも初めてで、デスクにほめられ嬉しくもあって、母にその夕刊を見せるため、東京のアパートから鶴沼の家に戻ってきた。母の姉が、京都と神戸から来ていて、新聞を見せながらその話をする、今日3人で靖国神社にお参りに

行って来たのだといって大泣きされた。

翌日久しぶりの休日だったので戦死した弟の話をじっくり三人から聴くことにした。

弟は、京都大学二年生で学徒出陣、昭和十八年広島の子備士官学校で一年間訓練を受け、少尉になってニューギニアに行った。やっと上陸したら、食料も弾薬もないことを知った。半年後に一通の手紙を寄こし、カエルやヘビ、ネズミは大ご馳走で、ゴキブリも、最後は死んだ日本兵の肉まで食べて、密林の中を戦うことなど一度もなく逃げまわってばかりと書いた便りを最後に、何一つ連絡はなく、終戦後、白木の箱に珊瑚がひとかけら、送られて来ただけだと言う。

ニューギニアで30万人が玉砕し、戦って死んだ兵士はごくわずか、大部分は飢え死にだったこともわかった。

母の姉たちの話で「あんたの生まれた直後に、父さんが東京から高知県に転勤することになった。母さんは栄養失調と引越しや慣れない街での気遣いで倒れて全く乳が出なくなつて困っている時、セメント工場から出征した若い職員が戦死して遺骨になつて帰つてきた。妻は出征前に身籠もつて、工場葬の直後出産したが死産だった。その事を姑に責められ、その上に離婚させられ実家に戻されたが、乳が張つてつらいという話を聞き、お父さんからあんたの乳母にとお願いして住み込んでもらい、その乳であんたは育つたのだと聞かされた。それで九州の工場に転勤しても、土佐から一緒に来て貰つたことも。」話を聞いている内に今度は母が泣き始めた。また、父は、セメントの原料の石灰採掘現場の事故で頼りの独り息子を失つた老夫婦の生活事情を仕事上知りうる労務・人事の担当者

だったので責任を感じて「通い」で、二人にお手伝いさんとして、体の弱い母を助けて貰うことにしたことも知つた。母の嗚咽は続いていた。これで食料もろくに無い戦時中に一介のサラリーマンの家に三人もの使用人をすくない月給でやりくりして大変だったことが理解でき、父の困つた人に対する責任の取り方の一端を見た。この事が、嫌いだった父の仕事を見直すきっかけになつた。

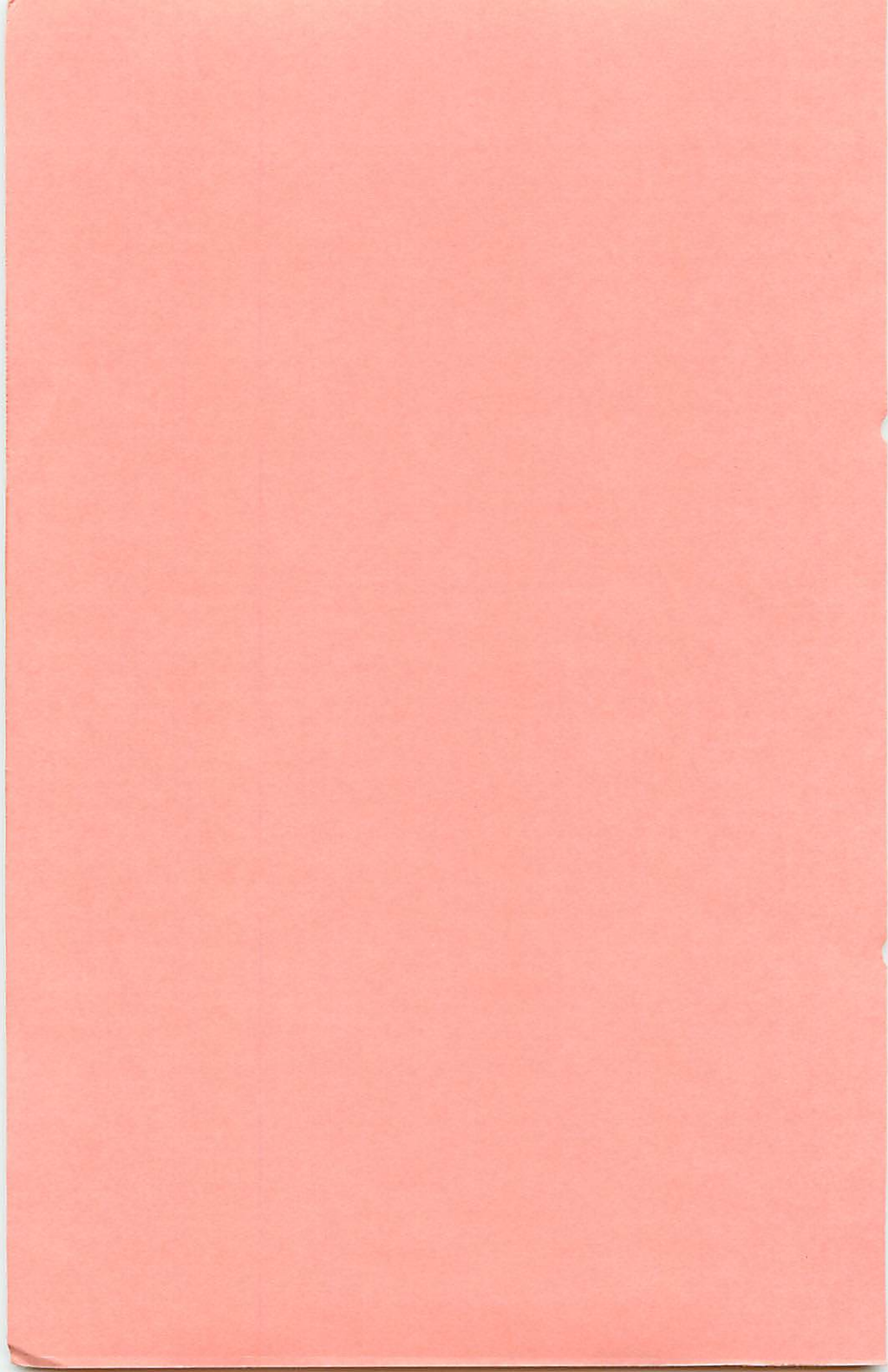
数年前、遺骨収集議員団の写真展を見に行つた時、玉砕した島の洞窟の中で、収集した頭骨を無造作に手にした記念写真を見て、同行のカメラマンと議員たちの歴史認識のレベルの低さと無神経さに驚かされたが、最近、憲法改正の自民党案が新聞で発表され、その中味の空恐ろしさに心底呆れ果てるばかりだった。

以上は戦争体験記というより「思い出の記」

である。本来、「靖国の姉」というべきだが、私にとっては母で在り、また、ジャーナリストになって初の記事のタイトルが「靖国の母」だった事に加えて、実母とその姉たちの泣き声と表情の記憶を辿りながらダブらせて五月三日の憲法記念日前に綴った次第である。



— 田中 素子 —





表紙・裏表紙のイラストは
梅原麦子さんの作品です

発行 ふじさわ・九条の会

連絡先 藤沢市亀井野 1371-5 小林 0466-44-0375

折原 0466-26-3321 永田 0466-34-1986

河西 0466-25-4951 渡辺(慈) 0466-26-7188

國枝 0466-26-0242 渡辺(聖) 0466-26-7425

一発行日 2012年6月一